

発明文化論

〈第86回〉

丸山 亮

言語と身振り

近頃、テレビ画面の一角に手話を挿入した番組をよく見かける。ニュースなどが中心で、聴覚の障害者には助けとなっているだろう。

日本で普通に使われている手話は、手指と頭や口の動きを総合して表現するが、日本語にそのまま対応させたものではない。また、地域による表現の違い、つまり方言があるという。英語を基礎にした手話では、アメリカとイギリスで方式が異なり、アメリカ手話は動詞に語尾変化をともなう自然言語だとされる。日本の手話は、歴史的にこのアメリカ方式の手話から影響を受けているようだ。

ところで日本風の手話は、台湾や韓国などでもある程度通じるらしい。昨年11月、台湾観光協会から招かれて当地を訪れた大阪府の手話通訳、松山正明氏は、台湾と日本の手話は似ているので親近感を覚えると語っている(朝日、14.11.26)。かつての植民地には、早くから手話も伝わっていたと思われる。

同様なことは韓国との間にも認められ、障害者同士の交流が図りやすい。日本が韓国を併合した1913年、朝鮮総督府は官立の聾教育機関として、教員のほとんどに日本人を送り込み、日本式の表現を広めた。ところが韓国と北朝鮮の間では、その後手話の乖離が進んで、南北分断の長期化による影響が表れてきているという。話し言葉の乖離はすでに指摘されていたが、手話にも及んでいるのだろう。

いずれにせよ、コミュニケーションの必要は、話し言葉や書き言葉のほかにも、身振りによるさまざまな方法を、随時生んできた。テレビの音楽番組を見ていたら、初めてオーケストラに來演した指揮者が、最初の棒の一振りで普段とは全く違う音を引き出したという演奏家の言葉を紹介していた。これは棒を振る動作以上に、指揮者の存在感に由来する暗黙の訴求力が発揮されたとみるべきだろう。

混んでいる食堂や居酒屋などで勘定をしてほしいと言いたいのに、声を出すのがはばかれるとき、手や腕で×をして×の意味を伝えたり、手の平に字を書く真似をしてチェックを求めることがある。これも一種の身体言語といえ、かなりあちこちで通用している。海外旅行に出かけて、外国語はできなくてもジェスチャーでなんとか通じたという話も聞く。

言語能力は、人間に生得的に備わっているものなのだろう。ただ、音声と身振りとは、どちらが先だろうか。人間の言語が身振りから始まり音声へ進化したという主張は、もっとものように見えるが確証はない。類人猿は身振りを使い続けているのに、人間が音声言語を獲得したのはなぜなのか。これらは択一的な関係にあるのではなく、口で言葉を発しながら手話を同時に行ったり、話し手が身振り手振りも交えて、説得力を補強しようとしていることもよくみられる。

天才チンパンジーとして有名になったアイは、図形文字やアルファベットを組み合わせた言葉をマスターすることで、数字と数の概念や、色などを動作で示すことができるようになった。ここには言語による思考が確かに介在していると思われる。また一方、市原ぞうの国を訪れたとき、象が鼻にくわえた絵筆で驚くほど立派な絵を描くのを見たことがある。この場合は、調教によって人間の視点で絵画表現になっている手本を象が教え込まれたのだろうと想像がつき、象に画才があるという気はしなかった。

情報処理技術の進展により、自動翻訳はかなりの精度にまで来ているようだ。これからは、言語と身振りを仲介する方法の開発も視野に入ってくるだろう。さらに視覚や聴覚以外の、臭覚や触角による伝達手段も、見直される時に来ている。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)